

令和4年度 第2回北海道 Society5.0 推進会議 開催概要

1 日 時

令和5年2月8日（水）13：30 ～ 15：30

2 実施場所

ホテルポールスター札幌 4階 ライラック

3 出席者

別添「出席者名簿」のとおり

4 議 題

別添「次第」のとおり

5 議 事

(1) 議事1 会議の進め方

・事務局（北海道）から説明（資料1）

(2) 議事2-1 令和4年度の取組について

・事務局（北海道）から説明（資料2）

(2) 議事2-2 データ利活用ワーキンググループの取組報告

・事務局（北海道）から説明（資料3）

(2) 議事2-3 デジタル人材育成・確保ワーキンググループの取組報告

・事務局（北海道）から説明（資料4）

(3) 議事3 令和5年度の取組について

・事務局（北海道）から説明（資料5）

(4) 議事4 取組の進捗状況について（令和3年度末現在）

・事務局（北海道）から説明（資料6）

(5) 議事5 意見交換

・事務局（北海道）から説明（資料7）

【委員からの主な意見】

<道の取組について>

- それぞれ取り組んだ事業や、背景課題がいろいろ書かれているが、実際どのようなバリューを生み出したか、それをさらに進めるためにはどうしたらいいのかということが資料に記載されると、さらに横展開するとき役立つのではないかと。
- 色々な事業があるが、これが広く認知されて活用されているのか。これを発信することが次に進めていく一歩に繋がる。

<市町村のデジタル化>

- 色々な地域が取組をされているが、市町村によって差が出るのは推進される力を持った方がいるからなのか？
(事務局) 市町村のデジタルの施策を進めていく上で、人材の確保というのが非常に大きな課題。サポートできる人材やアドバイザーの派遣など、もう少し拡充しなくてはいけない。

<データ利活用ワーキンググループの報告について>

- 非常に良い検討がされている。データ連携基盤についてはオープンデータだけでは無く大事なことが2点ある。一つはデータモデル、標準的なデータモデルでデータを作ることではかのエリアと合わせる事が出来る。もう一つはオープンソース。国が勧める「FIWARE」などのオープンソースを使うことでガラパゴスにならず、グローバルに共有可能なデータが作られる。標準というものを強く意識していただくと良い。
- 民間、中小企業でデータ利活用という話になっても、どのように活用したら良いかわからない。中小企業が使っていくためには具体的に市町村の持っているデータをこんな風を使うことが出来るというモデルが必要で、データ活用の具体的事例を示していただくとありがたい。
- 市民を巻き込んで社会を変えていくためにはエビデンスが必要。データを基に解析したエビデンスを行政がそれに基づいて、市民一体で地域を変えていく取組につなげて行く。道の行ったデータ棚卸しを179自治体でも連動して、データ連携基盤もしっかり念頭に置きながら形を作って進めていくべき。
- 今まで経験や勘に基づいて立案されていたものを、データに基づいた政策立案（ENPM）が必要ということで我々もこのデータ活用を進めていきたい。道の構想しているデータ連携基盤については、市町村や民間の共同利用も可能なのか？
（事務局）市町村も使える形で作っていきたいと考えている。
（委員）一緒に取り組めて行ければいいと思っている。

<デジタル人材育成について>

- ワーキンググループで人材育成の方は、とりあえず大きなフレームができた。データ利活用を含めた北海道の今後の取組や地域の取組に人材育成をセットでやっていくことが大切。教育プログラムと連携しながら地域課題を解決するなどの形で実装していただく。来年に向けて皆様方にボールを繋ぐ議論をしたところ。引き続きそういった観点で議論してほしい。
- DXを進める人材は、ただプログラムが出来るだけではダメで、やはり今から高校生や小中学生の頃からこういった形で社会に役立つためにはどうすれば良いか、またはお客さんとのコミュニケーションがどうすればうまくいくかなど、自分で考える力を付ける教育が特に大事。
- デジタルというのは座学では学びきれないので、以下に実践の場を提供するかということ。いかに機会を提供するかというのが、これからの行政の役割。今回決めたことをどんどん進めてほしい。
- 人材育成の考え方というのは、自治体の中の人事制度にもぜひ適用して、まさに色々なスキルセットが自治体の中の職員でも必要。
- 周りを巻き込んで行くようなものは、もともとプロパーでいろいろな現場を担当している方のほうが得意だったりするので、どういう人材をどのように育てていくのか、そして、どのような機会を通じて、育てていくのかといったところを、自治体の中でも話して進めていくと素晴らしい。

- 問題はおそらく、どのように人を育てるかだと思う。私の経験で言うと、自分の近くに見本となる人とか、こうやるんだと示してくれる人が近くにいること。今はすごく遠くにいるのだと思う。

<今後の北海道 Society5.0 の実現に向けた取組について>

- 全体として、北海道 Society5.0 のロードマップに従って、どういう所に力点を入れていくべきか、どういう所が手薄になっているか確認しながら進めることが大事。
- 北海道全体のものづくりの現場や一次産業の現場では人手が足りない、高齢化して労働力が無い。そうしたことを改革して、クオリティを保ったまま少ない人数で北海道を回していくために、この北海道 Society5.0 というのは必要なこと。うまくメリハリを付けながら進めていただければ良い。
- 次年度に向けてデータ連携に興味があり、具体的な取組を動かしていきたい。データ利用の取り決めのところがテクニカルで難しいが、比較的シェアしやすいところから取り組んで、1年後にはこんなことが出来たという話を聞きたい。
- DX がなかなか進まない 中小企業にも、なんとか底上げしてほしい。いろんな事例を紹介したり、勉強会を開くなど、道庁に協力をお願いしたい。
- 北海道らしい Society5.0 のモデルケースをどんどん輩出してほしい。例えば自動運転やドローンなど、北海道だからこそできる Society5.0 というのがあると思う。全国的にもモデルになるような事例をどんどん輩出してほしい。
- 国、道、それから行政、民間の役割はそれぞれ違えども、やはり様々なことに取り組むことによって、もっと魅力発信がなされれば良いと思う。
- 今回資料を共有して、人材育成やデータ利活用が非常に重要になってきたというふうに共有できた。ただ、それが地域の方まで浸透できるかというのはこれからの鍵になってくる。それをいかに可視化して、地域で実装しよう、社会実装しようというふうに持っていくかというのは今後の課題。
- 北海道をデータ利活用先進地にしたいというようなキーワードが、この資料の中にあった、ぜひそうした先進地に向けて、一緒に取り組んでいければと思う。
- 100 件事例があっても、それが定着するのは 10 分の 1、その中でこれが必要だと残るのがさらに 3 分の 1、100 やって 3 つくらいが残る。それでも十分。
- データ連携基盤は Society5.0 の中の非常に大きな概念になる。この中で、取り組んできたときに、皆さんが最初考えたことは違うのかもしれないけれども、次のフェーズに行くときには、やはりその データを全部連携させるというマインドが必要になる。
- 本当に必要から発しているオープンデータというのがまだ見えていない。本当はその段階まで行かなければ、Society5.0 という新しい社会はできてこないんだろうと思う。